

令和5年度（2023年度）第1回熊本博物館協議会 議事録

令和5年（2023年）10月6日（金）10:00～11:30

於：熊本博物館 講堂

出席者

【委員】

松下委員（会長）、鈴木委員（副会長）、鶴嶋委員、渡辺委員、田島委員、池上委員、早田委員、松永委員、日高委員、水洗委員、清田委員、太良木委員

【市】

坂本館長ほか博物館職員

〈次 第〉

- 1 開会
- 2 主催者挨拶
- 3 会長挨拶
- 4 議事
 - (1) 令和4年度（2022年度）事業報告について
 - (2) 令和4年度（2022年度）熊本博物館運営点検評価報告について
- 5 その他
- 6 閉会

<議事>

【令和4年度（2022年度）事業報告について】

会 長：それでは、次第に従い、まず令和4年度事業報告について事務局から説明をお願いいたします。

館 長：令和4年度の事業につきまして、報告をさせていただきます。

令和4年度の館運営全般に関しまして、包括的な報告後に、学芸班、総務企画班の各主幹から個別の事業報告をさせていただきます。

ここ数年は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、臨時休館を繰り返しておりましたが、この令和4年度につきましては、ワクチン効果等にもより収束傾向などもありまして、感染対策を講じながらではありますが、臨時休館を行うことなく、着実に来館者が戻ってきていただけた年度となりました。

そのような中で、夏休み期間には夏季特別展「世界の大翼竜展」を開催することができ、多くのお客様に来館いただくことができました。

また、企画展につきましても、ほぼ予定どおり実施することができております。

このように令和4年度は新しい生活様式に沿いながら本格的に活発な博物館運営を実践できた1年となりました。

以上が私の総括的な報告となりますが、各主幹から個別の事業報告をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

— 学芸班主幹より令和4年度（2022年度）事業報告について説明 —

会 長：ありがとうございました。すごく盛りだくさんでしたが、今の説明に対して何かご質問やご意見があれば、出していただきたいと思います。まず私から一つ、これだけのイベントをするのに現状、学芸員の方あるいは職員の方は何人ぐらいおられるのですか。

館 長：令和4年度につきましては、塚原の職員も含めて合計で25人ですが、学芸員としては11名です。また、館長が1人と副館長1人、あと総務企画班が3名で、事務系職員としては館長を入れて5名、博学連携という形で再任用の学校の先生が2名おります。プラネタリウムの会計年度任用職員を4名雇用しており、塚原の方にも3名の職員が配置されております。今年度は若干体制が変わっていますが、ほぼ同じような形にはなっております。

会 長：年間企画は、学芸員の方々がアイデアを出して進めていくのですか。それとも前年踏襲という形ですか。

事務局：前年踏襲する部分もありますが利用してくださる方で、リピーターの方も結構おられます。同じことをやっても、飽きられてしまいますので、常に新しいことを考えつつ、同じことをやるにしても中身を多少変更するなど、そのような工夫をしております。主に学芸員のアイデアによるものです。

会 長：人員は足りていますか。

館 長：人数はすぐに増えるわけではございませんので、今いる職員の中で、できる範囲のことを精いっぱいやるという形で取り組んでおります。やはり、来場者数や満足度等が1番の指標になるかと思うので、そういう形で皆さんに喜ばれるような館であれたらなと思っております。またイベント関係については民間団体さんとのコラボレーションという形もなるべく取り入れて、昨年度はJALさんより「航空教室」という、空に関する啓発事業実施の申出があり、当館にて様々なイベントを通して「空」について学んでもらうという、そういう形のコラボレーションを率先的にやっています。以前にもJAXAさんやJR九州さんに来ていただき、お互いに社会貢献活動という形で実施しております。企業様も企業PRにもなる部分もあるのかなと思うのですが、当館としても普段の常設展とは違うものがそこにある、また来館したいというきっかけにもなりますので、積極的に取り組んでおります。

会 長：ほかに何かありますか。

委 員：博物館法では、博物館の取組事業として、資料研究とか技術的な研究が位置づけられていて、それら専門的事項をつかさどるのが学芸員となっていると思うのですが、昨年度の事業の中で、研究あるいは調査等の事業として位置づけられて、取り組まれたものがあるのか。ありましたら教えてください。

事務局：次の点検評価のところで紹介させていただこうかなと思っていたのですが、館報の63ページ以降をご覧ください。ここに、令和4年度に関しては七つ、資料紹介も含めて調査研究の成果を掲載しております。

会 長：ほかにご質問等ありますか。

委 員：企画展のテーマの設定に関する質問です。この資料の1ページから2ページのところ。熊本城と明治維新の展示について、2ページの備考のところで、「アンケートでの来館者満足度も上々で、この幕末維新时期というテーマが一般市民の興味関心を広く集めていることが再確認された」とあるのですけれども、熊本博物館さんの企画のテーマで、「一般市民の興味関心を広く集めている」と思われるものが幾つかあって、それを、どういう感覚で、テーマ設定されているのか等、もしありましたら教えていただきたいと思うのですけれども。人気のテーマというかですね。

熊本城関係がそうなのかなと思ったりするのですが、いかがでしょうか。

事務局：テーマの設定はそれぞれ学芸員の発案によるものですので、そのときの流行りなどにもアンテナを張りながら、主に学芸員の研究対象のテーマにはなると思うのですが、今何をやるべきかというタイミングに関しては、それぞれ、周囲のものを見つつ、例えばテレビ等で話題になった等も考慮しながらテーマ設定を行っております。

館 長：合わせて本日お配りしております「加藤忠広と熊本城」という企画展も、飯田丸五階櫓の奇跡の1本石垣が本年中に復旧するということもありまして、今回テーマにしました。やはり、その時々世間から注目を浴びているものをキーワードにすると、きっかけとしては、より来ていただける機会となるのかな、というところは当然考えながらやっているところでございます。

事務局：企画展のテーマ設定について補足いたします。展示会のたびに会場で、「今後博物館で展示を行う場合にどういったものが観たいですか」というようなアンケートをとっております。その中で寄せられた意見とかも参考にしながら、展示会を企画しております。令和4年

度特別展が翼竜展に決まった経緯は、毎年のアンケートの中で、こども達とかの親御さんの意見に「恐竜や古生物の展示がみたい」という意見が、根強くありまして、これに加えて、当館にある翼竜の化石が見つかったからちょうど30年という節目でもありましたので、そういったタイミングも見ながら、時期を設定したというようなところもありました。

会 長：ありがとうございます。熊本城に詳しい委員さんから、博物館に期待することなどありませんか。

委 員：はい、多岐にわたる企画・特別展があって、本当に大変だなと思います。また、この新型コロナで大変だったと思うのですが、これからはまたアフターコロナで、コロナとつき合っていくということになります。事業報告の18ページの広報活動・刊行物について、もうこれからはこのSNS等を活用した広報、学習情報の発信というのはすごく重要になると思うのですが、この数字は令和4年度のもので、増えているのだろうとは思いますが、数字の変化・効果が、これだけでは分からないので、例えばいつから始めて、年度ごとにこういう推移があります、というようなものがあれば効果等が確認できたのかなと思います。私はこういう世代ではなくてあんまり使用してないのですけれども、これからはもうちょっとホームページとかFacebookとかをしっかりと見たいと思います。YouTubeもチャンネル登録者が520人ということですが、面白い内容・興味をひく内容の企画展とかあったら、それをかいつまんで分かるような内容のものを流すとか、興味を喚起して来場につなげる等が可能だと思うのですが、そういう取組はされていますか。

館 長：やはりこのSNSの活用というのも熊本市自体も大西市長が後押しして活用するようという動きもあるのですが、やはり1番はこのコロナの影響で来館者が来たくても、当館に来られないという状況がありまして、そのために何ができるかということで、おうちで楽しんでいただくようなものの情報発信、また、先ほど委員からありましたように、企画展のPRのために、企画展をする前にはプロモーションビデオをつくりましてYouTubeで流すなどしています。加えて、熊本市の広告事業で、辛島地下駐車場の通路にマルチビジョンがあるのですが、熊本市のイベント情報等を無料で放映できるのでそちらに掲載したりとか、いろんな形で視覚的な効果を使ってPRなどもしております。当然、企画展の映像等、撮ることで記録にもなるかと思いますが、それをアーカイブとして残すこともできますし、そういったものを含めてYouTubeのいいところ、X（旧Twitter）のいいところ、Instagramのいいところ、それぞれの特色に合わせた広報を戦略としてやっていきたいと考えております。

委 員：ありがとうございました。大まかでいいのですが、登録者・視聴者等が増えているか増えていないかというのは分かりますか。

館 長：大幅にと言いたいところなのですが、確実に増えてはおります。次からは、推移等についても表記したいと思います。

会 長：関連して、提示資料の入場者数は令和４年度だけですが、コロナ前と比較して、例えば３年前とか、元に戻りつつある段階でしょうか。

館 長：昨年度が約９万３０００人ですが、令和３年度が約６万人、令和２年度が約４万１０００人ということで、やはり少なかったですね。令和元年度が約８万６０００人ということで、それ以前はリニューアルでお休みでした。数字として比較対象にならないのですが、リニューアル前の数値としては、大体平均して１０万人ぐらいがベースになっており、特に大きな特別展とかあったときには１番多い年で、約２３万３０００人で、これは恐竜展をやったときですね。ちょっと数字が飛びぬけています。ですので、我々も大体１０万人か１２万人をベースというふうに想定しているのですが、それに対して昨年度が約９万３０００人で、まだまだ元どおりではないものの、少しずつ回復はしているのかな、と考えております。実は、今年の特別展で「透明標本展」というのを実施させていただいて、目標は３万人だったのですが４万２０００人ほどご来場いただいております。そういったこともあって、今年度もある程度の入場者は見込め、来館者が戻ってきているのではないのかなというふうに思っているところでございます。以上です。

会 長：一点お尋ねですが、資料中、入場者数は下の表のプラネタリウム観覧者を含めての９万人ですか。

館 長：プラネタリウム観覧者数は入場者数の内数です。

【令和４年度（２０２２年度）熊本博物館運営点検評価報告について】

会 長：ご質問とかあれば、また後ほど時間をとりたいと思いますので、次に移らせてください。では続きまして、運営点検評価を事務局からお願いいたします。

館 長：令和４年度運営点検評価報告について、私の方から総括的な説明をさせていただきます。まずこの運営点検評価報告につきましては、平成３０年１１月に策定しました「熊本博物館リニューアル後の運営方針」の中で運営の検証と評価を行うことが示されております。このようなことから、今回、この結果を当協議会に報告いたしまして、今後の運営の改善、充実に資するため、意見を求めるものでございます。「未来へつなぐ熊本の記憶－集める・伝える・創造する－」という全体のテーマを掲げまして、魅力的な展示活動、楽しく学べる教育普及活動、各分野における調査・研究及び収集・保存活動など、総合博物館にふさわしい、多種多様な活動を積極的に展開しているところでございます。令和４年度の運営の点検と評

価についてですが、前年度に引き続きまして、新型コロナウイルス感染症対策を講じながらの運営となりましたが、様々な工夫に努めながら行事・イベント等を実施いたしております。また、各分野の通年講座や、学校と連携して取り組んでいる学校教育支援事業など、徐々に本来の博物館活動を取り戻すとともに、次の節目に向けて着実に一步踏み出すきっかけとなる年になったかと思っております。今後も長年蓄積されてきました熊本の歴史や文化、人と自然の深いかかわりを、楽しく分かりやすくお伝えし、多くの皆様に親しまれる博物館を目指してまいりたいと思います。引き続き、ご支援とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。私からの総括的な説明は以上でございます。引き続き、各担当主幹から個別報告をさせていただきます。

— 学芸班主幹・総務企画班主幹より令和4年度(2022年度)運営点検評価報告について説明 —

会 長：運営点検評価報告は以上です。今の説明に対して何かご質問等ありますか。

委 員：質問よろしいでしょうか。ボランティアさんについてです。先ほどから話が出ておりますけど、限られた職員数で幅広く活動をされる上でも、こういったボランティアさんはとても大事じゃないかなというふうに思っています。具体的に何人ぐらいおられて、どんな分野の活動、例えばグループごと、自然科学グループとか歴史グループとか、そんな感じで活動されているのかとか。24ページを読ませていただいたら、それぞれの講座とか教室の受講生の中からボランティアを募集されているのかとか、仕組みを教えていただければと思いますので、よろしくお願いします。

館 長：このボランティアにつきましてはリニューアルオープン後に、どういう形で進めるべきか結構悩みました。以前は“博萌会”という形で、かなり大きな組織になっていたということだったのですが、運営方法とかそういうことにも苦慮したということ等がありました。そこで一旦、リニューアル後の当館のボランティアにつきましては、各講座の中から活動していただける方々を選んで館の活動について応援いただく、というスタイルでまずは始めようという方針に改めました。ボランティアという形で人を集めるのではなくて、その時々によ請をして、そのときにはお名前をいただいて活動するという形になります。ご協力いただいた方は市のボランティア保険の適用になりますので、名簿に登録して活動いただいております。一般公募をする形のボランティアというのは、現在は行っておりません。

委 員：ありがとうございます。講座とか教室に来ていただいた方の中から、今回こんなイベントをしますから、というときにお声掛けをして、ご都合がいい方に来ていただくという感じがすね。ボランティアさんを何人登録しているとか、そういった形では特にないということでしょうか。

事務局：今、植物分野では、ボランティアさんと一緒に活動しているものがあります。一つは寄贈を受けて、そのままになっている資料等に、ちょっとクリーニングが必要だったりする場合があるので、標本の扱いに慣れている方にお声掛けして、一緒にクリーニングしていただいたりしています。また、定期的に、今年はフィールドを江津湖に設定して、月に1～2回、どんな植物がどこに分布しているのかというのを調べたりしていますので、そのとき写真を撮ったり、記録をしたりというのを一緒にお手伝いしていただきながら、みんなで学ぶような活動です。人数の変動はありますが、大体毎回10人ぐらいずつで活動している状況です。

委員：ありがとうございました。県立美術館もボランティアさんに色々とお手伝いをいただきながら進めています。確かに専門的なところをどこまでお手伝いいただくか、他の博物館でもご苦労されていると聞いています。現在、うちの美術館では四つグループがあり、年度当初に登録をしていただいています。子ども美術館などのイベントを中心に活動していただくグループ、全国の美術館・博物館から山のように送られてくるポスター、資料やチラシなどの整理をしていただくグループなどで、大変助かっています。今はチラシ等もすごくデザインが素敵で、紙質もとても良いものですから、会期が終わって廃棄してしまうともったいないので、これを活用した封筒とかバッグを作ってイベントの特にお配りするなど、とても活発に活動していただいております。限られた人数で運営していく点では同じかと思いますが、ぜひ引き続き、ボランティアさんの活用についても考えていただければと思います。以上です。

館長：我々もボランティアの活用方法とか市民参画という視点でも必要だとは思っておりますので、いろいろ他館の成功事例等々を教えていただきながら生かしていきたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

会長：これは無報酬ですか。交通費とか。

館長：無報酬となります。

会長：委員の美術館も無報酬ですか。

委員：そうですね、同じですね。ボランティア保険には入っておりますが、本当にありがたい存在です。

会長：では他にありませんか。

委員：はい、先ほど事務局からの報告の中で駐車場問題の話があったのですが、今日、私は自転車で参りました。来るときに駐輪場がどこにあるのかな、というのをホームページで見せていただいたら、駐車場の説明はありますが、駐輪場のことには何も触れてないので、自転車は停められるのかなと思いながら来ました。入場者数をみると小学生中学生が同じくくりになっているので、どのぐらいの割合で小学生・中学生が来館しているのか分かりませんが、高校生・大学生がかなり少ないのは、自転車で行動することがすごく多いからではないかと思います。小学生だと車で保護者が連れて来ますが、中学生・高校生は保護者となかなか行動してくれませんし、子どもたちは自転車のほうが自由に動けるので自転車がメインになって、公共交通機関の利用は少ないのかなと思います。このホームページだと、自転車での来場の方が自転車を停められるかがわからず、公共交通機関でのルートを探す手間もあり、博物館に行くこと自体をやめておこうとなることもあるのかなという気はしました。駐輪場の案内があると高校生・大学生とかの入場者数が変わってくるのかなと思いました。以上です。

館長：アクセスの問題については、やはり我々も苦慮しておりまして、幅広い年齢の方にご来館いただく方法というのは課題としてあります。先ほど、学芸班主幹から説明があったように駐車場の問題につきましても、もともと熊本城域にあるということで、最寄りの三の丸駐車場は、当然熊本城のお客さんも利用されるし、藤崎台球場のお客さんも利用されるので、当館だけのものではありません。最近では、それぞれのイベントの状況を事前に情報交換して極力重複しないようにとか、他施設で大きなイベントがある場合は早めに告知するようにしております。また、公共交通機関の利用ということで、「しろめぐりん」の利用促進、バスの存在を知っていただくことも必要です。また、市電も杉塘電停はすぐ近くにあるのですが、そこからだと歩いて5分というのも私はここに赴任するまで知りませんでした。そのことについてももっとPRすべきだということで、先ほどあったSNSの方で、実際に杉塘電停から私と職員で歩いて5分間で着きますよ、という「歩いてみた動画」を作ってアップするなど、広報にも取り組んでおります。また、駐輪場につきましても、熊本市で取り組んでおりますシェアサイクル「チャリチャリ」というのがありまして、当館はサイクルポートにもなっております。それらも含め、表示については確かに今のところホームページに載せておりませんので、対応したいと考えております。

会長：今日は停められたのですか。

委員：今日はちょうど駐車場のところに案内の方がいらっしゃったので、どこに停めればいいですかとお尋ねして停めることができました。

会長：結構大事なことです。よろしくお願いします。ほかに何かありませんか。

委員：はい、3 ページ 3 の「他の博物館等との連携強化」の今後の取組についてお尋ねなのですが、社会の、博物館に対して求める役割が高度化・多様化したことに伴いまして、博物館法が改正されました。その中の 3 条で従来の博物館の事業として、資料の収集保存、展示、調査研究に加えまして、2 項に他の博物館との連携・協力、そして 3 項で、地域、例えば、地方自治体、学校であるとか、あるいは、民間団体、地域の様々な主体と連携協力をしながら、例えば過疎化であるとか、少子高齢化、国際交流、観光振興等といった地域課題を解決する、あるいは地域に貢献していくという役割も求められるようになっております。私もこれを受けて現在策定中の中期計画の中にそういった内容も最重要課題として盛り込んで今後の事業の再構築を検討しているところでございます。熊本博物館さんの方で今後の地域への向き合い方・貢献について、恐らくまずは熊本市区、市の単位になると思うのですが、何かグランドデザインがありましたら、あるいは館長の青写真がありましたら、教えていただければと思います。

館長：法改正があって、地域に根づいた、開かれた博物館というワードもありますし、当然ながら我が館としましても地域から求められる施設になりたいというイメージを考えております。それに対して、具体的なビジョンというのはまだ、特に私の中ではないのですが、やはり親しみやすい、来やすくなるような施設、また、いろいろな地域の方々がちょっとここに寄ってくださるとか、ここで休憩してくださるとか、そういったスポットになればいいなと思っておりますので、我々受け入れる側がオープンな気持ちでお迎えできるような形でありたいというふうに考えております。加えて、当館の情報を積極的に発信して、こういうところですよ、ということでもご利用できますよ、というのを周知する必要があるのかなと思っております。最近、「こどもまんなか」というワードが、こども庁創設に伴い聞かれるようになったかと思うのですが、当館でも実は「こどもまんなかプラネタリウム」という取組をしました。もともと乳幼児を持たれたお母様・お父様には博物館の敷居が高い、プラネタリウムというと、そこで騒いじゃったりとか、泣いたりしたら困る、と躊躇される方も多いのではないかという声がありました。当館のプラネタリウムスタッフに、赤ちゃんがいるお母さんがいらっしゃいまして、その職員が何か出来ないかなということで発案し、「泣いても OK」というオープンなプラネタリウムの会を開きました。そのときは、もう会場に乳幼児の方を連れお客さんがたくさんいらっしゃって、賑やかに泣いて、大騒ぎだったのですが、それはそれで楽しいなと思ひましたし、逆にこういう形でも博物館に来られるというのが伝わったと思います。このように、いろんな対象者を限定することなく受け入れられるような取組をオープンにしていくことで、地域に根づくような施設になるのではないかなと思っております。また、他施設との連携につきましても、ネットワークセンター様とは今後とも密に情報交換させていただいて、協力関係を築いていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。以上でございます。

会 長：ありがとうございました。もうそろそろ最後ですが、よろしいですか。はい。保存科学がご専門だと聞いております。

委 員：こちらにも保存科学の担当の方がいらっしゃるの、きっちりやっておられると思います。私も、初めて今回参加させていただいて、本当に学芸員の方は大変なんじゃないかな、というぐらいの活動をなさっているなと感じました。一つですね、講師派遣が大変だ、というようなことが書かれていましたので質問です。例えば、小中学校とかに今年度はこういうものをやりますというような情報を流して、それに対して依頼してくるのか、あるいはランダムに来るのか、その辺はどのような流れになっていますでしょうか。

事務局：大体、学習のプログラムは決まっております。例えば、熊本市の江津湖というのがあります。その近辺の3校ぐらいは毎年、4年生になると江津湖についての学習があり、江津湖の話をしてくれませんか、とか。こちらが準備したプログラムだけではなくて、別の依頼が直接来ることも結構多いです。観察会やってくださいとか。毎年のもに加えて、その先生がまた別の学校に異動したら、今度はその地域のもののお話をしてくれないだろうか、というふうにだんだん対象が広がっていきます。このように、こちらが出している学習プログラム集に掲載されているから頼んでみようっていうのもありますけれども、直接、別プログラムでお願いしますというのがかなり多いです。

館 長：学芸員にはそういった講座に関して担当するような派遣も多いのですが、博学連携という観点では、熊本市の校長・園長会という校長先生と園長先生たちが集まる会がありまして、その中で情報提供を随時しております。その辺に関しては、別の者から説明いたします。

事務局：先ほど学芸主幹の方からも説明がありましたが、こちらから学校に出かけて行う学習プログラムである「お出かけ」用の派遣授業プログラム集と、博物館に「お迎え」して博物館でできる学習プログラム、館内学習プログラム集というのを作っています。それぞれ、基本的にこういうことができますよというプログラム例を示しております。これはホームページでも見られるようになっておりますので、それらを各学校の先生方が見られて、こういう授業をお願いしたいという打診を事前にいただきます。それに対して、出勤シフトの関係上、担当学芸員がその日不在ということもありますので、日程調整が可能であれば実施するという流れです。内容につきましても、先ほど言いましたけれど、これは一つの例ですので、それぞれ話し合いの中で、少し追加・削除をしたり、新しいものを取り入れたりとかしながら、時間も互いの滞在時間等に合わせて苦労・工夫しながらやっているというところです。事業については校長・園長会等でも説明し、4年に1回は改訂したプログラム集を各学校に配付しています。また、ホームページでも更新・紹介し、希望するプログラムを選んでもらっています。

委員：小学校代表の学校関係者という立場で、今のプログラムの件で発言いたします。館報の34ページにもありますが、私が昨年度まで在籍しておりました小学校で、理科専科の職員が、「星の動き、星座に関して教えることはできるけれども、さらに詳しく教えてもらえ」ということで派遣授業を依頼し、4年生の子どもたちに教えていただきました。その感想を私も読みましたが、子どもたちは星にとっても興味を持ったようです。前任校の小学校は運動場が広く、よく星が見えます。夜に親子で来て、実際に星を眺めてみて、教えていただいた星座等が見つけれられたので感動しましたとか、実際に自分で見て体験してみたいといったことも感想に書いてありました。このことから子どもたちにとっても分かりやすく教えていただいたことが分かりました。

会長：では、他にないようであれば、この件はこれで終わりたいと思います。その他ということで、事務局から何かありますか。

館長：特にありません。

会長：委員の方から何かありますか。

委員：先ほど行った質問に関連してお尋ねします。まず、博物館の調査研究というのは博物館活動の根幹であると、いうお話でした。時間確保が難しいという課題があるということだったのですが、この調査研究にかかる予算、経費の確保というのは、どのようにされているか、あるいは、それが十分に確保できているか。

館長：予算の話だと難しいところもあるのですが、調査研究というのは学芸員にとっても博物館にとっても重要なことだと認識しております。予算の中にも事業に係るもの、施設に係るもの、いろいろあります。その中で、できる範囲で調査研究のための出張の経費だったり、研修会の参加費だったり、そういうのを確保・拡充できるよう努力はしております。ただ、昨今の熊本市の財政状況も踏まえて、なかなか潤沢にはいきませんので、やはり工夫が必要だと考えております。

委員：そういった調査研究費を確保するために外部資金などを獲得していくような、そういった手立てなどはお考えでしょうか。

館長：今のところ外部資金など、そういったところについての検討はまだできておりません。

会長：それは、この前の国立科学博物館のクラウドファンディングで予想を超えるお金が集まった、というようなことが念頭にあられるということではないですね。

委員：そうですね。調査研究費でしたら科学研究費助成事業など、経費を申請できる機関に登録をされるとか、そういったことによって研究活動を活性化していくという手立てもあるのではないかと、というふうに思います。

館長：そういった話題につきましても、先週、トップマネジメント研修というのが文化庁でありましたので参加してきましたのですが、そういった外部資金などの財源をどのように確保するのか、というのも重要な課題になるという話もありましたので、国の補助事業などを活用することも念頭に置いて考えていきたいと思います。

会長：私から一ついいですか。先ほど聞きそびれたのですが、ハルキウの「ウクライナから見た星空（プラネタリウムの特別投映）」が1日だけありましたよね。実施情報を聞いたのが直前だったので行けなかったのですが、これはどういう経緯で実施されたのですか。

館長：もともと天文の学芸員が研修会に行ったときにその情報が入って、ぜひ当館にも来ていただけないか、というような形で交渉して実現したものです。タイムリーなことでもあり、そういったウクライナの話も博物館で聞けたら、お客様にも聞いていただけたらいいのではないかと、ということがありまして交渉を進めて実現したものです。ただ、相手方の都合等々も当然ありますので1回だけの開催となりました。

会長：評判はいかがだったですか。

館長：事前にプレスの方にもリリースし、やはり、時期が時期だけに多くの取材の方々に来ていただきました。当館にとっては、そういった活動をした博物館ということでクローズアップをされたので相乗効果があったと捉えています。若干イレギュラーな活動だったかもしれませんが、必要な取組であったと考えております。

会長：分かりました。他になれば、これで本日予定された議事は終わりました。
委員の皆さんご協力ありがとうございました。